

カミューの幸福

— 人と作品 —

河 合 熙

1

第1次世界大戦が終って五年目、Paul Valéry はすでに嵐の前にいるような不安を抱いた。彼の不安はその後四半世紀にして不幸にも現実となった。世界人口の半を戦争に巻きこみ、1億4,000万の兵士を戦場にかり立て、5,000万を越える死傷者とヨーロッパだけで推定4,000億ドルの財産被害を残し去った第二次世界大戦である。ドイツ軍のフランス占領は1940年6月から連合軍によって解放される44年8月まで続いた。「神を信じたものも 信じなかったものも 共に讃えた 兵士どもに囚われた 美しい女を……」¹⁾で始まる Louis Aragon の詩はナチス・ドイツとその傀儡である Vichy の Pétain 政権に対するフランス国民の Résistance (抵抗運動) が、国の名誉と自主性の恢復を目指す国民運動であり、それが政治的であることよりもまず人間的な方法で行なわれたことを象徴的に物語っている。

多くの者が捕虜になり、また逮捕拉致された苦しい陰鬱な長い占領時代に、Albert Camus はつぎつぎと作品を世に送っていった。死後1962年に刊行された *Carnets* (『手帖』1935-42, 1942-51の全2巻) の1938年12月のところにすでに、「今日ママンが死んだ。あるいは昨日だったかも知れない。」²⁾の有名な一節で始まる *L'Etranger* (『異邦人』) の書き出しの部分が見られ、1940年5月のところには、「*L'Etranger* 完成」と記されている。³⁾ 出版はそれより二年おくれるが、戦争によって人生の不条理をふかく体験した人々の共感はその人気を爆発的なものにした。なんらかの思

1) Louis ARAGON, *La Rose et la résida.* — *La Diane Française.*

2) *L'Etranger* p. 9

3) 1935. 5~1942. 2 (Gallimard) p. 129, p. 215

想を感覚的に理解させるのが文学なのである。Camus は1943年から四度にわたって *Lettres à un ami allemand* (『あるドイツ人の友への手紙』) を書いたが、その中で、「私は祖国のためならどんな種類の偉大さでもさしつかえない、よしんばそれが血や虚偽の偉大であってもかまわない、とは思われないのである。……人間は永遠の不正に対して闘うために正義を肯定すべきであり、不幸な世界に対して抗議するために幸福を創造すべきであると思ったのだ。」⁴⁾ と、ナチス・ドイツへの憤りを覚えながら、その友との訣別の意をのべている。この *Lettres* はまた Camus の創作活動の面からいえば、すでに書かれていた *Noces* (『結婚』1938年)、*L'Etranger*, *Le Mythe de Sisyphe* (『シジフォスの神話』1942年) の幸福な生や不条理の世界の確認であると同時に、後に *La Peste* (『ペスト』1947年) や *L'Homme Révolté* (『反抗的人間』1951年) と展開されていく連帯による反抗の論理の周到な準備としての要素が随所に見られることにも注目しておかねばならない。

L'Etranger の前には1937年に完成された未発表の習作 *La Mort heureuse* (『幸福な死』) があり、上記 *Carnets* にはそのプランや断章と *L'Etranger* のそれとがほとんど時期を接して散見できる。Camus は1913年、当時まだ植民地であった Algérie の Mondovi という町に生まれた(1954年にアルジェリア戦争が起り、1963年に独立した)。日焼けした顔色と無言の劣等感をもつ下層階級での父 Lucien Camus の生涯は血と肉で綴られていた。太陽は別として Lucien の貧しさと本国の貧しさの間に、いったい質的にどれ程の差異があったろう。彼は息子のために太陽を大切にしていた。第一次大戦が始まると緒戦に、Lucien は Marnes の戦場で頭に裂傷を負い、眼はつぶれ、一週間のあいだ瀕死の苦痛を味わって、名誉の戦死を遂げた。Camus の生後、一年たつたたぬうちのでき事である。母親は家政婦として働き、年金と両腕だけで子供たちを雨露から守るために貧民街の狭い住居に移った。1923年、リセ(国立高等中学校)の給費生

4) p. 19~20, p. 72

に推薦された少年 Camus はこの貧民街から金持ちの学校へ、賃仕事の現実から現実と遊離した知識の幸福感へと往き来するのだった。母親は黙ったままだった。彼女の人生も、関心も、子供たちも、そこにあるべく限られているのだし、それはまた当り前の存在だから、感じるもくそもなかった。その子供は大きくなり、勉強するだろう。かれの母親は相変らず沈黙をつづけるだろう。Meursault (*L'Etranger* の主人公) の母は、Camus にとって、一番早くから一番近くにいた。

Quand elle était à la maison, maman passait son temps à me suivre des yeux en silence.⁵⁾

家にいた時、ママンは黙って私を見守ることに時をすごした。

……ni maman ni moi n'attendions plus rien l'un de l'autre, ni d'ailleurs de personne.⁶⁾

ママンも私もお互いに何一つあてにしていなかったし、他の誰からも何一つあてにしていなかった。

Camus はリセの上級で稀な素質を周囲の先生たちから認められた。しかし、17歳のとき肺結核の最初の発作におそわれ、大学の教壇に立つ希望もたれてしまった。⁷⁾ その先生たちの一人、Jean Grenier という哲学の教授は、実存に関する皮肉で詩的な説明や懐疑的な調子によって少年 Camus に思想的に深い影響を与えたのだが、昨年出版した *Albert Camus —souvenirs* (『追想アルベール・カミュ』) の冒頭に、長い間教室に姿を見せなくなった Camus を心配する余り学友を同伴させて見舞いに行ったときの印象や大黒柱を失った家庭の貧窮の有様を、思いやりの心で書きとめている。さらに、この『追想』によれば、同情に対する拒絶の意志は、Camus の場合、まったく受身的に沈黙と単音節のことばで表わされ、心なしか手を背にまわした彼の仕草は、Grenier 教授の胸に突き刺さったま

5) *Etranger*, p. 12

6) *Ibid*, p. 125

7) Morvan LEBESQUE, *Camus par lui-même* (Seuil, 1965.) p. 9~18

ま長くはなれなかったのである。普通の子供ならまだ自己を抜け出せない年令で、Camus にはすでに生か死かの問題が必要であった。彼は自分のためにでなく全ての人のために幸福以上の救いを求めている。Camus の性格の特徴を理解する唯一の手掛りとして、何よりも Algérie を忘れることはできない。年を経るにつれ、彼にはますます故郷への思慕がついていったのである。そして、Algérie と母とは一つの愛に溶かされ、Camus の心の中でばらばらになることはなかった。『追想』の著者は最後に、*L'Etranger* をいま読み返してみて、残酷な叫び、——人間の叫びというより、不当に傷つけられた野獣の叫び声——を聞く思いに締めつけられた、と語っている。理性の冠を剥ぎとられた Pascal の呻きにもたとえられようか。Camus は1960年1月14日、Paris の自宅に向う路上で、自動車事故により、世を去った、46歳。François Mauriac の追悼文のことば通り、不条理が曲がりかどで彼をねらっていたのであろうか。不条理は Camus にとって人生の結論ではなく、幸福に生きることの出発点だったのだが。

殺人の罪で死刑の宣告を受けた Meursault が「このしるしと星とに満ちた夜を前にして」見いだした幸福とは何なのか。神の罰を受けて無益な労働に汗するシジフォス (*Le Mythe de Sisyphe* の英雄) を幸福だと思い描かねばならぬ理由はどこにあるのか。

Camus における幸福の種々相を概観しよう。

2

<幸福>という同じことばが Camus の作品中にリフレンのごとく響いているが、それが常に同じ意味をもつものであるか、検討してみなければならない。*Noces* (『結婚』1937) の中で歌われている幸福は Sisyphe や Rieu (*La Peste* 人物) が説くものと同一であるか。Meursault と Kaliyev (*Les Justes* 『正義の人々』1950, の人物) は死に臨んで、一方はいま幸福であるといい他方はこの先幸福になるというが、二人の使う幸福ということばは同じ意味をもつものなのか。*L'Etranger* と *Les Justes*, *Le*

Mythe de Sisyphe というような別個の作品においてでなく、同一作品や同一時期に、幸福という一つのことばが既に種々の面をもっていなかったか。

CÆSONIA: Je suis heureuse de……Mais pourquoi ne puis-je pas partager ce bonheur avec toi ?

CALIGULA: Qui te dit que je ne suis pas heureux ?

CÆSONIA: Le bonheur est généreux. (*Caligula*. Act. IV—13)⁸⁾

セゾニア: あたしはうれしい。でも、どうしてこの幸せをあなたと分かち合うことができないの？

カリギュラ: おれが幸せでないと誰がいった？

セゾニア: 幸せは惜しみなく与えるもの。

La Peste や *Les Justes* と同じく、*Le Malentendu* (『誤解』1944) でも登場人物はちがった幸福を追求しているように見える。Jean の幸福は妻 Maria (ともに *Le Malentendu* の人物) のそれとはちがう。Tarrou の幸福も Pieux や Rambert のそれとはちがう。Kaliayev と Dora (ともに *Les Justes* の人物) は理解と愛で強く結ばれているのだが、求める幸福は同じでない。Camus は単数の幸福だけでなく複数の幸福についても語っている。<de libres bonheurs>⁹⁾ や <des bonheurs faciles>¹⁰⁾ がその例である。この複数の幸福はそれぞれが異っているばかりか、互いに分離できないものである。Caligula, Cæsonia, Scipion の三人は確かに三人のちがった人物だが、目に見えない三位一体をなしている。Scipion は事実 Caligula に、自分は彼に似ているといい、次に Cæsonia に、自分は Caligula と同じ苦しみをもっているという。Caligula はまた Scipion に、自分は彼と同じ徳を求めているという。最後に Scipion の決定的な出発のあとで Cæsonia の所へもどってき、誰のことを考えているのか彼女に尋ねられて、Caligula は、

8) p. 222~223

9) *Discours de Suède*, p. 20

10) *Noces*, p. 54

A celui-ci. Et puis à toi aussi. Mais c'est la même chose.

(Act. IV—13)¹¹⁾

あいつのことだ。それからお前のこともな。しかし、結局同じことだ。

と答える。

Le Malentendu の中で、Maria は夫の Jean が夢のような幸福を追う
といって責め立てながら、すぐあとで次のようにいう、

J'ai toujours tout aimé en toi, même ce que je ne comprenais
pas et je vois bien qu'au fond, je ne te voudrais pas différent.

(Act. I—4)¹²⁾

私はいつもあなたのすべてを愛してきた、私に理解できないところまで。現に
私はそのままのあなた以外ほしくない。

La Peste では、Rieu, Tarrou, Rambert, Grand という一群の人物の
間に不可分の特徴が見られる。しかし、詩人 Grand と医師 Pieux, 神秘
家 Tarrou と官能主義者 Rambert というように個々の関係を見れば非常
な相異があることも事実である。

混乱を避けるために、なお作者のいう所に従いながら、幸福ということ
ばの正確な定義を求めていこう。まず *Noces* の中にそれが見られる、

…qu'est-ce que le bonheur sinon le simple accord entre un être
et l'existence qu'il même ?¹³⁾

一つの存在とそれが営む生活との間の単純な調和でないとしたら、いったい幸
福とは何だろう。

Camus は調和によって何をいいたいのか。次のことばが答らしい、

……il n'a pas été dit que le bonheur soit à toute force insépara-
ble de l'optimisme. Il est lié à l'amour. Ce qui n'est pas la même
chose.¹⁴⁾

幸福はどんなにしてもオプチミスと離ちがたいとは限らない。幸福と愛と結び
ついている。——これは同じことではない。

11) p. 218 12) p. 26 13) p. 85 14) p. 86

調和とは従って愛における結合を意味する。カミュ的幸福は愛するものと愛されるものとの、生活するものと生活との、生存するものと生存との結合する状態である。幸福を表現するための union (結合), accord (調和), amour (愛) というこの用語法は Camus の常套である。

Camus の理想的な幸福の姿は *Noces* の中にある,

Sentir ses liens avec une terre, son amour pour quelques hommes, savoir qu'il est toujours un lieu où le cœur trouvera son accord, voici déjà beaucoup de certitudes pour une seule vie d'homme.¹⁵⁾ Cette union que souhaitait Plotin, quoi d'étrange à la retrouver sur la terre? L'unité s'exprime ici en termes de soleil et de mer.¹⁶⁾

大地との絆, 人間への愛を感じることに、こころが諧和を見出す一つの場所がいつもあると知ること、——ここには既に一つの人間生活に関する多大の確信がある。…プロチノスが望んだこの一致を、この地上に見出すとは何という不思議だろう。統一は太陽と海との関係において表現される。

La Peste の Rieux はこの定義にきちんと従っている。彼の場合、幸福は愛と同義である。とりもどした幸福にひたって抱き合う Oran の男たち女たちの姿を見、Rieux は彼らの祖国がこの窒息させられた町の外壁のなかにあった人々について、

Elle était dans ces broussailles odorantes……les pays libres et le pays de l'amour……Et c'était vers le bonheur qu'ils voulaient révenir.¹⁷⁾

真の祖国はあの丘のかぐわしい叢林のなかに、……自由な国や愛の重みのなかにあった。……そして、幸福に向かって、彼らは帰ろうとしていたのである。

と、語っている。

幸と不幸の Camus 的観念は、結合と分離、連帯と孤独 (結合がないという意味での)、一致と不一致の観念と一体をなしている。

L'Envers et l'Endroit (『裏と表』1937) では、Camus は彼独特の不幸

15) p. 60 16) p. 60~61 17) p. 246

を描いて見せる。

Me voici sans parure. Ville dont je ne sais pas lire les enseignes……où rien de familier ne s'accroche, sans amis à qui parler……rien ne peut me tirer pour m'amener vers la lumière plus délicate d'un foyer ou d'un lieu aimé. Vais-je appeler, crier ? Ce sont des visages étrangers qui paraîtront……L'homme est face à face avec lui-même: je défie d'être heureux……Un grand désaccord se fait entre lui et les choses. ¹⁸⁾

何の飾り立てもないこの私。……看板も読めない町……そこには親しみあるものとして何一つない、話しかけようにも友はいない……私を救って、楽しい家やいとしい土地の温かい明^{あがり}の方へ連れていってくれるものがなにもない。呼ぼうか、叫ぼうか。眼に入るのは見知らぬ顔ばかり……人間は自分と向い合っている、私は彼が幸せだとは思わない。……彼と物事の間に大きな溝がある。

次は Camus の幸福の状態である、

Je respire le seul bonheur dont je sois capable—une conscience attentive et amicale……Chaque être rencontré chaque odeur……tout m'est prétexte pour aimer sans mesure. Des jeunes femmes……les étagères de fruits,……autant d'appuis pour qui ne sait plus être seul autant de signes d'amour pour qui est forcé d'être seul. Bien sûr, je n'avais pas changé. Je n'étais seulement plus seul. ¹⁹⁾

私は自分にできる唯一の幸福を吸う——注意深く親しみをこめた意識がそれである、……ゆき会うどんな生きものも、この通りのどんな匂いも、すべてが私にとって、際限なく愛するための口実となる。……若い女たち、露店に並ぶ果物、……一人ではいられない者には、これだけの支えがある。……一人でいることを強いられた者には、これだけの愛のしるしがある。……たしかに私は変りはしなかった。ただ私はもう一人でないだけであった。

リセの頃、結核で長期欠席をしていた Camus を Grenier 先生が訪ねにいったことを書いた。十年後に Camus が Grenier 先生に語ったことばを落していたようである、

18) p. 88 19) p. 96～97

……Vous étiez venu et de ce jour-là j'ai senti que je n'étais pas aussi pauvre que je le pensais²⁰⁾

……先生に来ていただきました。あの日から私は、自分が思うほど不幸ではない、と感じています。

幸福は合体を意味する。そしてこの合体は *Noces* にあるようにただ感覚的なばかりでなく、＜知的＞であり精神的である。

……Si la pensée découvrait dans les miroirs changeants des phénomènes, des relations éternelles qui les puissent résumer et se résumer elles-mêmes en un principe unique, on pourrait parler d'un bonheur de l'esprit dont le mythe des bienheureux ne serait qu'une ridicule contrefaçon.²¹⁾²²⁾

もし思考が、現象という移ろいやすい鏡のなかに、現象を要約しうるような永遠の関係、しかもそれ自体ただひとつの原理へと要約されうるような永遠な関係を見いだせば、ひとは精神の幸福について、——あの至福者たちの神話も、ただ、その滑稽な引写しにすぎぬような精神の幸福について語ることができるであろう。

La Peste の Tarrou の場合、幸福とは意識が平和に結びつくことであり、この結びつきは精神的である。

Camus の作品中に、愛の対象との感覚的、知的、精神的な合体があるとき、自分を幸福だと主張する人物が一人いる。*L'Etranger* の Meursault である。

……, devant cette nuit chargée de signes et étoiles, je m'ouvrais pour la première fois la tendre indifférence du monde. De l'éprouver si pareil à moi, si fraternel enfin, j'ai senti que j'avais été heureux, et que je l'étais encore.²³⁾

……このしるしと星とに満ちた夜を前にして、私ははじめて、世界の優しい無関心に心をひらいた。ことほど世界を自分に近いものと感じ、自分の兄弟のよう

20) Jean GRENIER, *Alber Camus Souvenirs*. p.15~16

21) *Le Mythe de Sisyphe* p.36 22) *Ibid* p.32

23) *l'Etranger* p.171~172

に感じると、私は、自分が幸福だったし、今もなお幸福であることを悟った。

彼は世界と合体するとき、こういったのである。

Caligula と Sisyphe とは、彼らが自分なりの反抗の理論と合体しているので、幸福だと思っている。

Il y a ainsi un bonheur métaphysique à soutenir l'absurdité du monde. ……La lutte elle-même vers les sommets suffit à remplir un cœur d'homme. Il faut imaginer Sisyphe heureux.²⁴⁾

こうして、世界の不条理性をささえつづけることには、いわば形而上的名誉がある。²⁵⁾……頂上を目がける闘争それだけで、人間の心をみたすのに十分たりるのだ。いまや、シジフォスは幸福なのだと思うねばならぬ。

こう見てくると、それぞれの幸福の相異は愛の対象の相異に由来するものであり、理論的には、愛に値する対象が種々ある限り、世界にはそれだけの幸福があるといえる。存在は Camus 的人間に幸福の選択を全く委ねる。そしてその理想的な幸福には、全存在、全現実との全的な合体が期待できるのである。それはまた人間生涯を通じての大きな幸福でもある。しかし、そこに辿り着くまでに Camus 的人間は現実の様々な部分との合体で部分的な幸福を見出すことができよう。すなわち、自然や、人間や諸々の精神的価値（愛や正義と同じく、ここに真実や美や平和などを求める）との合体である。

肉体的幸福は、とくに *Noces* の中で謳歌されている。それは Camus 的人間が大地と婚姻を結ぶところに見られる。この肉体的幸福はそれ自体に＜小さな幸福＞の全音階（地の糧に与えられた肉体的快樂から、星空に見出す清純の喜悅まで）がある。最も低い次元で、最も母性的な段階、すなわち Camus が *L'été à Algérie*（「アルジェリアの夏」——*Noces* に所収）で語っている気軽で急激な幸福から見ていこう。

24) *Le Mythe de Sisyphe* p.129, 168.

25) 「いわば形而上的幸福を感じる」の意か。（清水 徹訳『シーシュポスの神話』新潮文庫，p.200 訳注）

La signe de la jeunesse, c'est peut-être une vocation magnifique pour les bonheurs faciles.A Belcour, on travaille très tôt et on épuise en dix ans l'expérience d'une vie d'homme. Un ouvrier de trente ans a déjà joué toutes ces cartes.Ses bonheurs ont été brusques et sans merci.Il ne s'agit pas alors de réfléchir et devenir meilleur.....J'apprends qu'il n'est pas de bonheur surhumain, pas d'éternité hors de la courbe des journées. Ces biens dérisoires et essentiels, ces vérités relatives sont les seules qui m'émouvant. Les autres, les «ideales», je n'ai pas assez d'âme pour les comprendre.²⁶⁾...L'eau profonde et claire, le fort soleil, les filles, la vie du corps, il n'y avait pas d'autre bonheur dans son pays. Et ce bonheur passer avec la jeunesse.²⁷⁾

青春のしるしとは、おそらく気軽な幸福に対するすばらしい執着だろう。.....ベルクールでは人は、早くから働き、10年にして一生の体験を汲みつくす。.....30才の労働者はすでにありとある札を賭けつくしている。.....その幸福は急激にきて、しかも容赦がない。.....反省することも、よくなることも問題にならぬ。.....超人間的な幸福というものもないし、日々の曲線の外に永遠があるわけでもない。このはかない本質的な幸福、これらの相対的真理こそ、わたしを感動させる唯のものである。他のものの<理想>は、これを理解するだけの魂をわたくしはもたない。.....深い澄んだ水、強い太陽、木の葉、肉体の生活、彼の国にこれ以外の幸福はなかった。そして、この幸福は若者とともにあった。

次の段階には、自然の美が与えてくれる美学的幸福というものがある。これは多分、Camus が *Noces* の終りの方で語っている幸福のことだろう。

Oui, il y a un bonheur plus haut où le bonheur paraît futile..... Ce qu'il faut dire ici, c'est cette entrée de l'homme dans les fêtes de la terre et de la beauté.Le monde est beau, et hors de lui, point de salut.²⁸⁾

そうだ、そこには幸福がつまらぬように見えるようなより高い幸福がある。...いい忘れてはならぬこと、それは大地と美の祭典に人間が加わることだ。世界は美しい、そして、世界をよそにして救いはない。

26) p. 54 27) *L'Exil et le Royaume*, p. 76.

28) p. 86, 87. 88.

これは *L'Etranger* の Meursault が、自分の人間性を捨てて大地と美の宴に加わろうと思いつ時に求めた幸福である。部分的には *L'Exil et le Royaume* (『追放と王国』1957) の女、——男たちの家を去り、星空と沙漠の風の招きに駆け出していく Janine の幸福でもある。

人間の結合のうちに、連帯感や人間の愛のうちに見出される＜人間的＞幸福は、とくに *La Peste* と *Les Justes* に描かれている。＜肉体的＞幸福と同じく、ここにもまた段階がある。まず、人間が性愛のうちに見出す幸福であり、初期の Rambert の幸福である。彼は初めの頃、ペスト伝染に近い Oran の街に留まらず、人間の連帯性よりも自分一人の愛を大事にしていた。彼の理屈は、公共の福祉も一人一人の幸福によって作られている、というのである。一段上の幸福、つまり、連帯性の幸福を知らなかった彼が、ペストの猛威に対する絶望的な防戦を戦い抜いた Oran 市民の姿を見て、最後に発見した幸福は次のようなものだった。

Ces couples ravis, étroitement ajustés et avares de paroles, affirmaient au milieu du tumulte, avec le triomphe et l'injustice du bonheur, que la peste était finie et que la terreur avait fait son temps.²⁹⁾

ぴったりと寄りそって、ことばを惜しみ、恍惚感にひたっていくつもの二人連れこそ、喧騒のなかに、幸福の勝利と気ままを感じて、ペストが終ったことを、恐怖の支配する時代の去ったことを確認していたのだった。

次の段階では、全ての人間との同胞的結合に見られる幸福がある。自分一人が幸福にいることは恥じなければならぬのかも知れない、と理解した＜第二の Rambert＞の場合である。それは Rieu の幸福であり、彼が指導する保健隊の人々（みなが個人的幸福をあきらめて共通の災難のために身を捧げ、そこにより大きな幸福を見出したのである）の幸福でもある。これは *Les Justes* の Kaliayev と Dora の間にも、*L'Exil et le Roy*

29) p. 244

aume の Arrast のうちにも見られるが、Camus は *L'Homme Révolté* (『反抗的人間』1951) の中で次のような Sasonov のことばを紹介している。

《Quant à moi, la condition indispensable du bonheur est de garder à jamais la conscience de ma parfaite solidarité avec vous.》³⁰⁾

「私の考えでは、幸福の不可欠の条件は、あなた方と私との完全な連帯性の意識を永遠に保つことです。」

Camus 的人間が追求した3番目の幸福は、これまでの2つとは非常に異なっている。＜肉体的＞ないし＜人間的＞幸福を求める人間は対象のうちに、風景の美しさとか人間の優しさとかいう具体的な答を見出してきた。しかし、形而上的と呼ばれる第三の幸福を求める人間は答を得ないように思われる。彼の対象には明確な名称がないか、もしくは、自由とか平和とかというような精神的価値をもつ名称があるからである。*La Peste* の Tarrou の場合がそれである。

D'autres avaient désiré la réunion avec quelque chose qu'ils ne pouvaient pas définir, mais qui leur paraissaient le seul bien désirable. Et faute d'un autre nom, ils l'appelaient quelquefois la paix.³¹⁾

他の人たちは定義できないような何かを求めている。しかし、それは彼には手にしたい唯一の財産であった。ほかに名前もないので、平和と呼んだりすることもあった。

L'Homme Révolté で述べられている形而上的反抗の場合も同じである。

Le révolté veut être tout, s'identifier totalement à ce bien dont il a pris soudain la conscience et dont il veut qu'il soit, dans sa personne, reconnu et salué.... A la limite, il accepte la déchéance dernière qui est la mort, s'il doit être privé de cette consécration exclusive qu'il appellera, par exemple, sa liberté.... Il agit donc au nom d'une valeur, encore confuse, mais dont il a le sentiment, au

30) p. 210 31) p. 245

moins, qu'elle lui est commune avec tous les hommes. ... Pourquoi se révolter, s'il n'y a, en soi, rien de permanent à préserver ?³²⁾

反抗者は一切であろうとし、彼は突然意識し、またそれが彼の人格のなかにあることをみとめ、尊敬してくれるように他人に望む善と、完全に同一化しようとする。……ぎりぎりのところで、彼がたとえば、彼の自由と呼ぶ排他的献身ができないとすれば、死という最後の失墜をも受け入れる。……だから、まだ漠然とはしていても、万人に共通と思われる価値の名において、彼は行動する。……自己のうちに、保存すべき永久的なものがないとしたら、なぜ反抗するのだろうか。

Les Justes の Kaliayev の場合も同じで、彼は Malraux の *La Condition humaine* (『人間の条件』1933)の主人公のように、生のみが生きている者同志の唯一の接触の仕方ではないと考え、死に幸福を求めて愛する者と一体になる。

KALIAYEV: Ceux qui s'aiment aujourd'hui doivent mourir ensemble s'ils veulent être réunis. L'injustice sépare, la honte, la douleur, le mal qu'on fait aux autres, le crime séparent. Vivre est une torture puisque vivre sépare. ... Mais ne peut-on déjà imaginer que deux êtres renonçant à toute joie, s'aiment dans la douleur sans pouvoir s'assigner d'autre rendez-vous que celui de la douleur ? Ne peut-on imaginer que la même corde unisse alors ces deux êtres ? (Act. IV)³³⁾

カリャーエフ：今日愛し合っている者たちは、結ばれたと思えば、一しょに死ぬよりほかはないんだ。不正が引き離す、恥辱が、苦悩が、他人を傷つける悪が、犯罪が、引き離す。生きることは責苦に等しい、なぜならば生きることはわれわれを引き離し……。あらゆる喜びを断念した二人の人間が、苦悩でめぐり逢うたとしか約束できないで、ひたすら苦悩のなかで愛し合っていることが、いったいどうして考えられないのでしょうか。同じ縄が、そのときにこそこの二人を結びつけるんだということが考えられないんですか？

<観念の純粹さ>、これこそ、この第三の幸福が求めるものであり、Camus 的聖者が追求したものである。

32) p. 27~28 33) p. 173~174

Charles Moeller は幸福のテーマと Camus 的人間の聖性の特徴に関連して、「Camus にあっては、幸福の選択は排他的である。それは最初の状態のまま最後まで変らない。宗教的昇華が実現されるのは、幸福のテーマの枠内にあってである。」³⁴⁾ という。しかし、Camus 的人間のうちには排他性も宗教性も考えられない。また Camus 的人間は Sartre 的人間のよう
に選択の人間ではない。Camus 自身、Sartre のように、ある特定の自己の価値観や方法論にもとずいて思索し、行動した作家ではない。良きにつけ、悪しきにつけその場その場の自己の判断や良心に従って行動した作家であり、そこには素朴な誠実さや柔軟性もあれば、またそれに伴う限界もある。Camus 的人間には、まさにその幸福の全的な特質のゆえに、選択することが不可能である。それは上昇する幸福であり、実現されるために苦行を求める幸福である。しかしながら、宗教的幸福ではない。Camus の聖者は人格神をもたぬ聖者である。彼の至上の幸福をなすものはあの崇高な結合、つまり＜聖者の＞、そして人間の結合を願う＜人間的＞結合である。幸福の枠内での Camus の＜超越的＞展望は、従って宗教的よりもむしろ形而上的展望となる。Camus 的人間が *Les Justes* の Kaliayev や Dora と共に辿りついた最後の幸福を形而上的と呼ぼう。

ところで、以上三つの幸福のほかにもう一つの場合が見られる。Caligula, Sisyphé, *La Chute* (『転落』1956) の J-B. Clamence らの幸福は自然や人間や精神的価値との合体にあるのではなく、何か否定的なもの、無、無意味のうちに、合体や幸福の欠如のうちにある。彼らはこのような欠如に耐えることができず、幸福なし生きることができないので、全力をつくして身代りを見つめる。彼らは人間と自然、人間と他者、人間と絶対との間の調和は不可能だと考える。従って、後向きになり、調和を拒否し、二重性をみずからのものとし、みずからの幸福とする。Caligula は、死が存在する以上、現世に幸福は得られないと考えて不可能を受け入れ、いわば不可能性を存在させるために心血を注ぐのである。こうして不可能性は彼

34) *Littérature du XXe siècle et le Christianisme*, p. 76

の幸福となった。

CALIGULA: ... je me suis senti tout d'un coup un d'impossible
.... Ce monde, tel qu'il est fait, n'est pas supportable. J'ai donc
besoin de la lune, ou du bonheur, ou de l'immortalité, de quelque
chose qui soit dément peut-être, mais qui ne soit pas de ce monde.
(Act. I-4)³⁵⁾

カリギュラ：……おれはな、突然不可能なことが必要になったのだ。……この世界は、今あるがままの姿では、我慢のならぬものだ。だからおれには月が必要だった、幸福といってもよい、いや不死の命か、それはおそらく間違いじみた物に違いないが、とにかくこの世の物ではない何物かなのだ。

不可能性を、無とみずからの空無化 (néantisation) を受け入れることが Caligula の幸福のあり方であり、自分の幸福のむなしさと狂いを告白しながらも、幸福であるとみずからにいきかせた。Sisyphé も、Caligula と同様に、世界の不条理のゆえに幸福を不可能と考え、愛によっても知性によっても、この世界に一致や調和は見いだせないと考える。全てが矛盾であり不条理であるがゆえに、不条理を受け入れてみずから不条理の人間となり、彼独特の幸福を考える。こうして意志の力により、悪は善に、不幸は幸に、悪魔的な反抗は比類ない喜劇となった。

Toute sa jolie silencieuse de Sisyphé est là. Son destin lui appartient. Son rocher est sa chose.... La lutte elle-même vers les sommets suffit à remplir un cœur d'homme. Il faut imaginer Sisyphé heureux.³⁶⁾

シジフォスの沈黙の喜びのいっさいがここにある。かれの運命はかれの手に属しているのだ。かれの岩はかれの持ち物なのだ……頂上を目がける闘争ただそれだけで、人間の心を満たすのに十分たりるのだ。いまや、シジフォスは幸福のだと想わねばならぬ。

La Chute の J-B. Clamence は、自分の幸福を作るのは絶対に利己的な高慢しか持ち合わせない。他者との合体において幸福は得られないと考

35) *Caligula* p.111

36) *Le Mythe de Sisyphé* p.167~168

え、死すべきもののむしいものと認める自己自身と合体する。

Oui, je ne me suis jamais senti à l'aise que dans les situations élevés....Mais jugez déjà de ma satisfaction. Je jouissais de ma propre nature, et nous avons tous que c'est là le bonheur bien que, pour nous apaiser mutuellement, nous fassions mine parfois de condamner ces plaisirs sous le nom d'égoïsme.³⁷⁾

そう、自分が高い場所にいないと、わたしはどうしても気持ちが落ちつかなかった。……わたしの自己満足については、とうにお察しでしょう。わたしは自己本来の性質を楽しんでいたのです。われわれは相互の安息のために、こうした楽しみはエゴイズムだからいけないというふりをときどきします。

Caligula, Sisyphe, J-B. Clamence の三人は分離 (la séparation) のうちに幸福が見いだせるといい、Meursault と Rambert と Kaliayev がそれぞれ自然と人間と＜聖なるもの＞との合体 (l'union) の上に立てた幸福を破壊し、もしくは少なくともそれを幻想と見なすのである。彼ら三人は、幸福とは人間が自己の実存と調和をとるところにある、と作者Camusが前に行なった定義から外れている。彼ら＜分離主義者＞が正しいのか、まちがっているのか、この世界は合体と調和の世界であるのか、それとも分離と離反の世界であるのか。

Camus の幸福のテーマは、＜結合＞ と ＜分離＞ に論議の焦点がしばられるようである。Camus 的人間はこの 根本問題を解決しない限り幸福を手に入れることができないであろう。幸福のテーマを設定すること、それは、合体が可能であるのか、分離が偶発的超越的なものにすぎないものであるのかを問うことである³⁸⁾。Camus の作品が幸福追求の中心に立つとすれば、この合体―分離の問題について、さらに個別的な検討が加えられねばならない。(1969. 11. 25)

作品の邦訳は、新潮社の文庫版を多く活用させてもらった。

37) *La Chute* p. 30, 27

38) Pierre NGUYEN-VAN-HUY, *La Métaphysique du bonheur chez Albert Camus* (La Baconnière, Neuchatel, 1968) p. 7~18